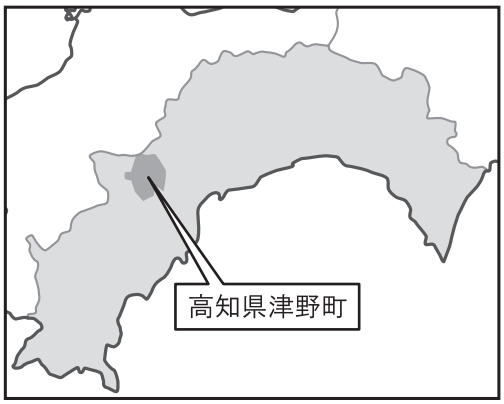
津野町自立支援協議会

［高知県津野町］

ここに注目

- ✔人口７千人弱。小さな町のモデル
- ✔定例会「がやがや会議」とは！？
- ✔「わくわくふれあいデー」成長の過程



1 地域の基本情報

人口・世帯数	6,702人／2,767世帯　※住民基本台帳 H23.３.１現在		
面積	197.98㎢		
地域特性	津野町は平成17年２月１日に葉山村、東津野村が合併して誕生。 高知県の中西部に位置。四国山地に抱えられた地域は急峻で、約90％が山林で占められ、農地や宅地の面積比率は低い。葉山地域は中央部を東西に清流新荘川が、東津野地域は東部を不入山を源流とする日本最後の清流四万十川、中央部を北川が流れ、どちらの地域も川沿いに集落が点在。 比較的穏やかな温暖な多雨の地域。冬季には、平野部で数 cm 程度の積雪も見られ、北部山岳地域では60cm 程度の積雪。 平成17年の国勢調査による総人口は6,862人で、５年前の人口7,258人と比べると、396人（△5.5％）減少。近年緩やかだった減少率は、少子化の影響を受け、やや大きくなってきている。		
手帳所持者数 ※H22.３時点	身体障害	知的障害	精神障害
	504人	45人	16人
社会資源の状況等	○社会福祉協議会が地域活動支援センター、就労継続Ｂ型事業、居宅介護事業、移動支援事業（個別型）を実施 ○老人福祉施設２施設、認知症対応型グループホーム１ヵ所 ○公共交通機関はバスのみ。本数も少なく、乗車率も低いため運賃が高い。 ○近隣５市町では、就労継続Ｂ型事業所等の就労系事業所が多い（小規模作業所から新体系へ移行）		

※参考：津野町ホームページ（http://www.town.kochi-tsuno.lg.jp/index.html）

2 地域の相談支援体制

○相談支援事業は直営と一部委託。

○直営は、保健センターに保健師２名、本庁（葉山地域）に福祉事務担当１名、西庁（東津野地域）に保健師２名と福祉事務担当１名配置。保健師は保健活動の一部分としての業務であり、事務担当は他業務と兼務。

○津野町を含む高知県高幡地区５市町は人口約６万人。相談支援事業所は３ヵ所。相談支援専門員は計５名。

津野町、中土佐町、四万十町の３町が、須崎市の相談支援事業所に共同委託。梼原町は直営、須崎市は単独で事業委託している。

○津野町では、一部委託として、５名の対象者を委託。直営で保健師が関わっている事例の中で、支援頻度が高い、他機関を巻き込む必要がある、年齢が若く就労支援の必要性がある等の観点で対象者を選定している。

○委託料は、１人につき月額１万円。（高知県相談支援体制整備事業費により半額補助）

3 地域自立支援協議会の組織体制・運営状況

⑴ 立ち上げ

自立支援法施行後の事業所の戸惑い

○「就労支援といってもノウハウもない」「日中活動って何から始めればいい？」など、もともと基盤もなく手本もない地域において、事業所は戸惑いを感じ、自立支援法の趣旨がのみこめない状況にあった

津野町障害者福祉計画策定後の作業部会メンバーのもやもや感

○作業部会での議論は非常に有意義なものであったが、計画の実現に向けては、課題は見えたが資源はない、具体的に動くイメージがもてない、カベが大きすぎて何から手をつけていいかわからないという状況に陥り、津野町が目指す「ともに生き、みんなが暮らしやすいまちづくり」に向かっているのか…、というメンバーのもやもや感に変わっていった

○さらに、現場では事業展開の悩みが解消されず、個別支援のスキルの弱さも課題となっていた

平成20年10月　「障害保健福祉に関するがやがや会議」開催

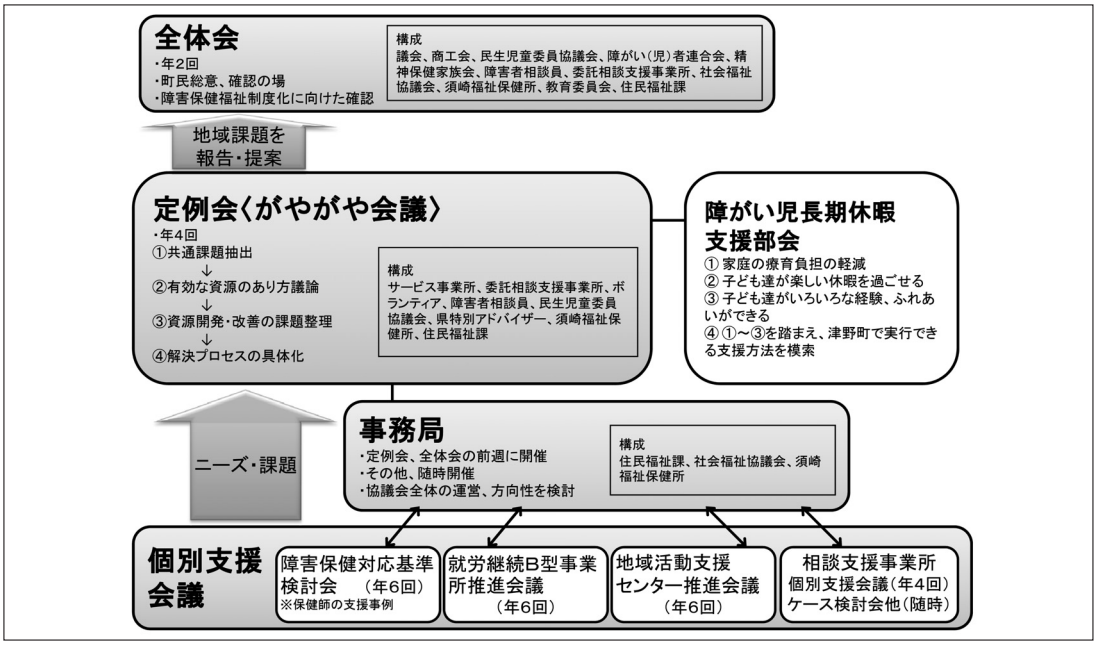
○事業所の戸惑いや作業部会メンバーのもやもやをテーブルにのせるため、「がやがや会議」を開催。作業部会のメンバーを中心に、24名が参加。

＊「がやがや会議の５原則」→５．運営評価指標からみた活性化のポイント　④構成員の参加

平成21年２月　自立支援協議会定例会として「がやがや会議」開催

○定例会「がやがや会議」をアイデアや知恵だしの場、全体会を承認の場として位置付ける。

⑵ 現在の組織図



4 具体的な活動成果

○「わくわくふれあいデー」開催

開催経過

①ＫＪ法による課題抽出－平成20年10月開催「障害保健福祉に関するがやがや会議」

テーマを「障害保健福祉に関することで気になっていること、こんな生活できたらいいのに…と感じること等思いつくことを出し合いましょう」と設定し、ＫＪ法によるグループワークで課題を出し合い、整理した。

②優先順位の決定－平成21年２月開催「がやがや会議」

前回のがやがや会議で整理された課題と障害保健対応基準検討会（組織図参照）から見えた課題を以下のとおり提示した。

・町内の居場所づくり	・車いすマップ	・欲しいサービス
・生活訓練の場	・環境整備	・地域の仲間づくり
・衣食住の確保	・実態把握	・ふれあいの場
・教育、心のバリアフリー、障害の理解	・金銭管理の支援	・将来不安
	・相談支援	・福祉サービス
・働く場	・自分らしい暮らし	・学校との連携
・収益の向上	・家族のコピーロボット	・勉強会の企画
・交通の便		

上記の課題を書き出した表に、参加者各自が取り組みたいテーマを２つ選びシールを貼り、選んだ理由を発表。

結果、一番シールが多かったのが「町内の居場所づくり」。その他の関連する項目も総合して、平成21年度は「日中活動の場・居場所づくり」をテーマに取り組むことを決定。

③具体的実施内容の検討－平成21年５月開催「がやがや会議」

事務局より、検討テーマ「日中活動の場・居場所づくり」に関連した３事例（身体障害・精神障害・障害児）を紹介。緊急性が高いこと、住民全体で取り組みやすいこと等の理由から障害児の事例を選択し、「障害児の夏休みの居場所づくり」を検討することとなる。

この事例に関して、「夏休みにいろんな経験をさせてあげたい。居場所があったら…」という思いをかなえるために、①使えそうな資源（人、場所、団体、サービスなど）を出し、②出た資源をつなげて実現できそうな方法を考えてみよう、というグループワークを実施し、具体的実施内容を検討していった。

④施行事業と振り返り、部会設置へ

平成21年度　施行事業「わくわくふれあいデー」開催（８月／１日間）

メニュー	陶芸、紙芝居読み聞かせ、自由遊び（ボール遊び・塗り絵・輪投げ等）
参加者	児童６名、講師・事務局等13名、ボランティア12名　　計31名

平成21年11月開催のがやがや会議にて実施後の振り返り。親の会からは人との関わりを持たせたい、いろんな体験をさせてあげたい、参加したボランティアからは疾病や障害の知識を頭に入れておきたい等の意見があがった。継続実施の必要性を認識し、次年度に向けては「長期休暇支援部会」立ち上げて取り組むこととなった。

⑤部会での検討と拡大実施

部会では、具体的な実施内容の検討や先行事例の視察等を行った。また前年度の振り返りをもとに、事前学習も開催された。

平成22年度　「わくわくふれあいデー」開催（７月～８月／10日間）

メニュー	陶芸、流しそうめん、パン作り、かき氷作り、買い物、絵手紙作り、調理（お好み焼き・ホットケーキ）、バーベキュー、プール、自由遊び等
参加者	児童延63名（実人数10名）、講師・事務局等延67名、ボランティア延116名、プール担当延26名　延計272名

協議会メンバーを通じて多くの地域住民がスタッフとして参加。住民に子どもたちのことを知ってもらうことができ、子どもたちにとっても地域とつながりができた。

5 運営評価指標からみた活性化のポイント

①課題の抽出	○個別支援会議には必ず事務局からも出席し、状況把握している。この個別支援会議自体がモニタリングを意識した内容となっており、地域課題の整理の場となっている。 ○「わくわくふれあいデー」開催に至る経過については、４．具体的な活動成果を参照
②社会資源の開発改良	**「わが町にあるものでやれるのか、まずはやってみろう！！」が基本** ○わくわくふれあいデーは、町にあるものでどれだけできるのかからスタートにしている。会場は既存施設＝町の集会所を利用し、メニューはがやがや会議のメンバーの一人が得意芸としていた陶芸を取り入れた。 まずできることから始め、ていねいな準備とていねいな振り返りにより、平成21年度の試行事業を成し遂げ、その成功体験から、平成22年度の拡大実施につながっている。
③行政の関与	**事務局の役割** ○がやがや会議運営のコツは「事務局の舵取り」。定例会、全体会の前には必ず事務局会議を開き、会議のゴール設定の確認、メンバー全員が参加し、意見の出しやすい進行方法を綿密に打ち合わせている。 **相談支援は発展途上** ○現状、事務局は行政主導。相談支援事業は他市事業所への一部委託としてスタートしたばかりであり発展途上の段階。しかし、相談支援事業所の個別支援会議によるモニタリング機能の充実が定例会への提案をスムーズにしており、協議会の運営を支えている。
④構成員の参加	**「がやがや会議の５原則」** ○がやがや会議は、とにかく自由な意見を出してもらう場。平成20年10月の「障害保健福祉に関するがやがや会議」で示された５原則も工夫の一つ。（資料１） ○わくわくふれあいデーには、多くの地域住民がボランティアとして参加。保健師活動等の日常業務を通じて、住民と事務局の顔の見える関係が前提としてある。また、参加にあたっては、どの場面でどんな役割を担うか（５Ｗ１Ｈ）を明確に伝えている。

（資料１）

ガヤガヤ会議の五原則

提案歓迎
批判もよいが、提案をしてもらうことが必要

思いつき結構
気軽に肩の力を抜いて・・・夢だからいいじゃないか

言っぱなし、聞っぱなし
発言に責任なし、議論は先送り

どんな意見も切り捨てない
突飛なアイデアが活きる

対面交通
夢をとりまとめ、それを参考にガヤガヤ会議を繰返す。

おまけ
十人十色は難しい。ぐちゃぐちゃに混ざれば灰色・・・・
でも、お互いを尊重しあえば虹色になる。・・・・だから
こそガヤガヤ会議は楽しいのだ

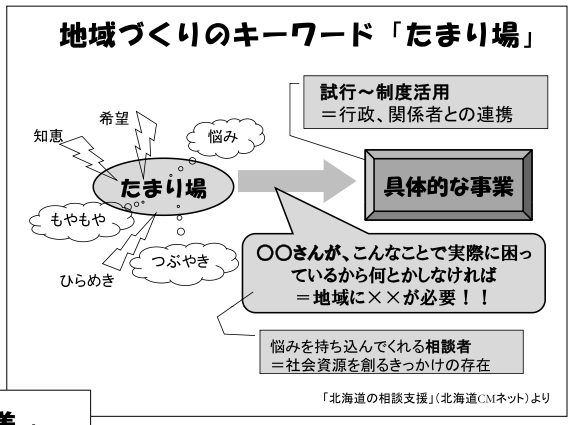
（出典『ブレイクスルー』梶原　拓・日比野　省三　著　講談社）

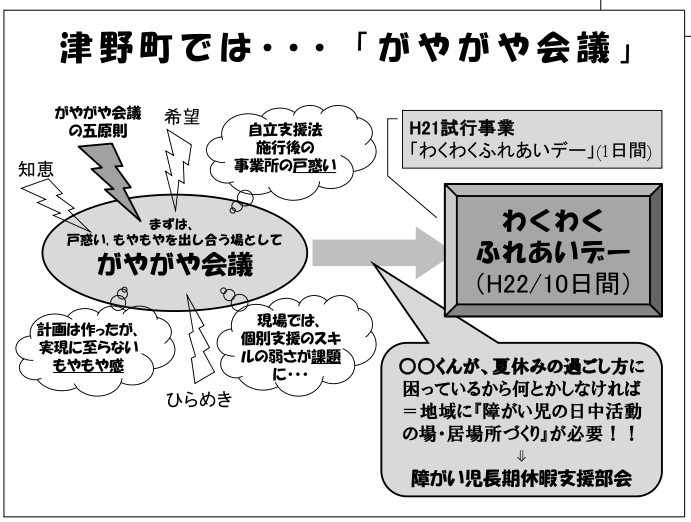
6 まとめ

地域づくりのキーワード「たまり場」

○地域づくりを進める上では、多様な人たちが集まり、それぞれが感じている悩みやニーズ、知恵等を持ち寄って協働する機会＝「たまり場」が重要です。

その「たまり場」が制度的に位置づけられているのが自立支援協議会で、津野町の取り組みを表すと図のようになります。





○自立支援法になったから…、自立支援協議会ができたから…、ではなく、町でできることから始めた津野町の仕組みは、多くの市町村で参考になる取り組みと考えられます。